

タテ社会の人間関係
第一社会の原理
中根千枝



講談社現代新書
3160

『タテ社会の人間関係』

中根 千枝 講談社／講談社現代新書

本館	請求記号：X/081/Ko19/105	資料ID：700020647
神田分館	請求記号： /361/N38/105 [Knowledge Base展示中]	資料ID：100873637

経済学部教授 坂口 明義

学生は社会人になるにあたって、物事を「やり抜く力」(GRIT)だけでなく、日本社会の規範に適合的な行動ができる力も身に付けなければならない。つまり、学科の勉強だけでなく「社会勉強」も必要。だがコロナ禍で、飲み会・バイト等の実地の「社会勉強」の機会は減っている。そこで、日本社会論や日本文化論の本を読むという理論的な「社会勉強」が重要性を増す。その手始めの一冊に薦めたいのが本書だ。社会人類学者である著者は、日本の「社会構造」の特徴を、「資格」ではなく「場」への帰属に基づいて社会を作る点に求める。例えば、エンジニアがその職種に基づいて企業横断的に基幹的な社会組織を作ることはなく、エンジニアも社長付運転手も同じ「社員」として企業の序列社会に組み込まれる。本書はこうした「タテ社会」の原理・特徴・弱点、タテ社会のリーダーシップや人間関係のあり方を論じて、国内外でベストセラーとなり、今も増刷されている。著者が昨年10月に逝去したのを機に、私も久々に本書を読み返してみた。再読して感じたのは、本書刊行50数年後の日本は過渡期とはいえ、今も「タテ社会」の構造が強固に残っていること、そして「タテ社会」についての本書の冷静・客観的な観察は、その後の数々の日本社会論に比べても秀逸であるということだ。「社会勉強」のための本として本書を推薦したい。